

音楽に見るリズムのリズム調整能力

赤ちゃんのぎこちない動きは、運動発達の上で重要である……。このことを前号で述べましたが、それでは、このことが子どもや大人になってからのリズム形成にどのように関連していくのかについて何回かに分けて考えていきましょう。今回は音楽のことについて触れ、その関連からスポーツの問題について次回から触れることにします。

そこで、音楽のリズムについてですが、そもそも音楽とスポーツでは、それぞれ表現される「リズム」は異なっていると思われます。これは定義の違いというよりは感覚的な違いといえるかもしれません。しかし、音楽や伝承舞踊からの影響がスポーツの中に見られることは間違いなさそうです。とにかく音楽におけるリズムはほぼ定義づけられているため非常に分かりやすいものです。

音楽家はリズム感がある、非常に正確なリズム感を持っている……。これは音楽家に対する一般的なイメージです。ところが、このリズム感というのは正確なリズムというとは少し異なります。楽譜に書かれた音符を正確に演奏しているかということではなく、微妙なズレがあることが分かります。

リズムは一定のパターンとして示されるものを意味しますが、そのパターンというのは、音や声の強弱で示すこととなります（一般的には、特定の楽器がそれを担い、ベースにすることが多くみられます）。そのリズムの速さの違いがテンポというわけですが、両者は密接に絡み合っているのは、言うまでもありません。

微妙なズレについてですが、この代表的な例としては、オーケストラの指揮者による違いがあげられます。同じ交響曲を別の指揮者で聴き比べてみると、はっきり分かるでしょう。私が過去に聴いてきた音楽では、ヘンデルの組曲「水上の音楽」がかなり指揮者によって違うなと感じていました。それぞれの組曲の中でも、テンポも違えば、リズムのとり方も

違う……。そして音ごとの強弱も変えながら演奏していることもわかります。指揮者、演奏家の腕の見せどころということになるでしょうが、聴く側にとっても好みの違いとして表れることになるわけです。

いずれにしても、このズレに重要な意味があることが分かりますが、もっと単純にリズムやテンポが、聴いた限りでは気づかないわずかな違いについても、「ゆらぎ」という問題との関係が昔からよく指摘されていました。音響を解析すると、ある程度の規則性がみられつつも、不規則な部分が含まれるということです。たとえば、ボレロという曲をご存知の方も多いと思いますが、ほぼ同じフレーズが70回ほど繰り返されるというユニークな曲です。この曲を聴いていても決して飽きることはありません。しかし、ある実験で、この曲をコンピュータによって極めて正確にリズム・テンポを揺らがすことなく、正確に「演奏」した結果、聴衆は飽きて、みな睡魔に襲われたという結果が報告されています。

この、リズム・テンポを微妙に揺らがせるという「リズムのリズム的調整能力」ともいうべき、少し高次元の能力が、実はコーディネーション能力としての“リズム能力”の本質に関わっています。そこで、音楽との関わり方からスポーツの世界とのつながりについて、特に赤ちゃんの時の不自然なリズム運動との関係から次回から順に触れていくことにします。

